

在外施設における日本語指導とその実践

— インターネットを使ったデジタル教材や交流学習を通して —

前ウィーン日本人学校 教諭

北海道美唄市立西美唄小学校 教諭 福 士 晶 知

キーワード：日本語指導，授業スタイル，デジタル教材，web型の学級日誌，交流学習

1. はじめに

オーストリア共和国のウィーンは、オーストリアの首都である。オーストリア共和国は、ヨーロッパのほぼ中央にあり、8つの国々と国境をもち、9つの州で構成されている。国土は日本の約4分の1。北海道と同じくらいの広さである。西部一帯には、アルプスの雄大な山々が連なり、東部には「蒼きドナウ」で有名なドナウ川が悠々と流れる、山と川の美しい国である。第2次世界大戦後、オーストリアは永世中立国としてスタートした。と同時にウィーンは、ニューヨーク、ジュネーブに続く、第3の国連都市として国際原子力機関（IAEA）、国連工業開発機構（UNIDO）などの機関が置かれている。1995年には、EU（欧州連合）に加盟し、ヨーロッパ諸国との連携を強めてきている。公用語はドイツ語。また、宗教はカトリックがほとんどである。通貨はユーロを使っているおり、ドイツ語の発音では、ユーロを「オイロ」と言う。オーストリア共和国全体では、人口が約830万人。ウィーンの人口は、2007年現在で約167万人となっている。日本人在住者は、約1000名。音楽学生や観光客が多いが、子どもたちを取り巻く日本語環境は非常に乏しいのが現実である。日本国内と違い学校の外を出るとほとんどがドイツ語という環境だ。そのため、日本語に触れる機会も日本にいる以上に少ない。ラジオやテレビもドイツ語や英語ばかり。書籍も国内ではほとんど手に入らない。唯一、NHKを中心とした日本語の衛星放送があったが、有料で値段も高いため加入している家庭は半分くらいだった。更に家庭生活でも日本人との交流が少なく、家族の会話が中心である。学校教育の中で日本語を駆使して伝えるという活動は非常に重要な活動であった。そのような中で活かされたのが、派遣前に取り組んできたITを活用した教育活動である。デジタル教材やインターネットを使った交流学習を行うことで、子どもたちが日本語を駆使する場面を多く設定した。私が赴任する以前はダイアルアップ回線しかなかったため、インターネットを使った教育活動はほとんどできない状態だった。しかし、近年のインターネット回線の高速化でオーストリアでもADSL（Asymmetric Digital Subscriber Line）回線の利用が可能となった。ウィーン日本人学校においても、ADSL回線への接続が可能となり、平成17年度途中からデータ送受信無制限での利用が可能となったため、その回線を教育活動の中で自由に利用できるようになった。

2. 活動の実践

(1) 教科リーダーを中心とした授業スタイル

私が平成18年度に受け持った4年生は女子2名という少人数クラスであった。一人が欠席するとマンツーマンでの授業。そのような中で授業を行うと日本語を多く話さなくても授業が成立してしまい、日本語を駆使する場面が少なかった。派遣前に経験していた複式授業の授業スタイルを取り入れ、教科リーダーを中心とした授業に取り組んだ。教師が授業を一方向的に進めるのではなく、子どもたちが中心となって授業を進める授業スタイルである。授業が始まると「昨日の復習をします。昨日は何をしましたか？」と前回の授業の復習から始め、「今日の学習を行います。」「教科書の○ページを開いてください。」「一緒に音読します。せーの・・・。」と子ども達自身で授業を進めさせた。このような授業スタイルで行うことで、友達同士の話し言葉ではない、フォーマルな話し方を身に付けることができ、委員会活動や縦割り活動の中でも自信を持って意見を述べたりすることができる話す力を育てること

ができた。教科リーダーで培われた話す力を学級会や朝の会・帰りの会でも活かし、日本語を駆使する場面を多く設定した。そこで身についた力を社会科のインタビュー活動や調べ活動など各教科の学習に活かした。

(2) 学級外で日本語を活かす

教科リーダーを中心とした授業スタイルを身に付けさせ、フォーマルな話し方を見つけてくると、今度は他学年の児童とのやりとりをする活動に取り組ませた。学級の中だけで行っていると人数が少ないため、マンネリ化してしまう。そのため、学級で身に付いた力を学級の外で活かそうと計画した。例えば、社会科の調べ学習で他の学年の子ども達に聞き取り調査を行わせたり、職員室で他の職員の方に質問したりする活動に取り組ませた。また、国語の「調べて発表しよう」という単元では、「日本語のテレビ番組をどのようにして家で見ているか?」「学校で好きなスポーツは何か」などのテーマを設定して、他の学年の子ども達に聞き取り調査を行いながら日本語の力を高めた。テーマの後に、具体的な質問を考えさせ、「テレビを毎日見えていますか。」「どのくらい見えていますか?」などの調査を行った。さらに他の派遣職員にもインタビューすることで、相手に応じた話し方、フォーマルな日本語での話し方や礼儀といったことを身に付けさせた。調査を行う際には、「挨拶をしっかりとる。」「相手の答えにうなずいたり、反応したりする。」など態度や表情についても触れ、コミュニケーションの取り方についても指導することができた。更に活動の後には他の学年の児童を招待して発表会を行った。学級内で行うだけでなく、他学年の児童に伝えるという活動を通して学年にあった言葉遣いや文章表現についても一緒に考えることができた。

(3) デジタル教材を活用

各教科の授業の中では、いくつかのデジタル教材を活用して授業を行った。特に国語ではデジタル教科書を用いて授業を行ったり、NHKのデジタル教材を活用したりした。国語のデジタル教科書では全員が黒板に映し出されたスクリーンを見ながら音読したり、繰り返し文章に触れさせることで読み取りを深めることができた。また、NHKの学校放送番組「わかる国語・読み書きのツボ」を利用し、日本語力のバリエーションを広げたり、日本語力の定着を図った。文法事項の単元を学習し、更に発展学習でデジタル教材を活用した。特に読み書きのツボでは、「てんでばらばら」や「『です』・『ます』でございます。」などを通して作文で使う点や丸、話すときに使う「です・ます」などを楽しく学ぶことができた。

また、道徳番組「さわやか3組」も活用した。日本の学校の様子を知らない児童も在籍していたので、道徳の番組を通して日本の学校の様子を知らせたり、問題場面ではどのように対応するのかを考えたりさせることができた。日本のテレビを見る機会が少ない子どもたちにとって、番組を使った授業は子どもたちの楽しみでもあり、授業に対する意欲を高めていた。

【3年間で利用したデジタル教材・番組】

国語：国語のデジタル教科書（光村図書）

：わかる国語3・4年生 <http://www.nhk.or.jp/rekishi/>

社会：にんげん日本史（小6） <http://www.nhk.or.jp/rekishi/>

：地球データマップ（中3） <http://www.nhk.or.jp/datamap/>

道徳：さわやか3組（小4） <http://www.nhk.or.jp/3kumi/>

学活・総合：キーボードアドベンチャー（小4） <http://kb-kentei.net/>

(4) web型の学級日誌で交流

朝の会や帰りの会、放課後を利用してパソコンで記録する学級日誌を使って、毎日の生活を記録させた。最初は

タイピングのスキルも身に付いていないため、1学期は学活などの時間を利用してタイピングスキルを鍛えた。その際にタイピング練習サイト、キーボー島 (<http://kb-kentei.net/>) を使いながら、スキルアップを図った。30級から始まるが、あの段・かの段など簡単な入力から取り組むことができ、スムーズにローマ字入力の力が身に付いていった。

その後、パソコンで打ち込む学級日誌を記録することでスキルを高め、1日の様子を日本語の文章で入力させた。日本語での文章を考える機会が多くなるように、学級日誌の打ち込みを行い、学習や生活の様子を記録した。ウィーン日本人学校のカリキュラムでは、小学1年生から英会話の授業が行われているため、英会話の活動と関連づけてローマ字も学習させることで、ローマ字入力にスムーズに取り組むことができた。

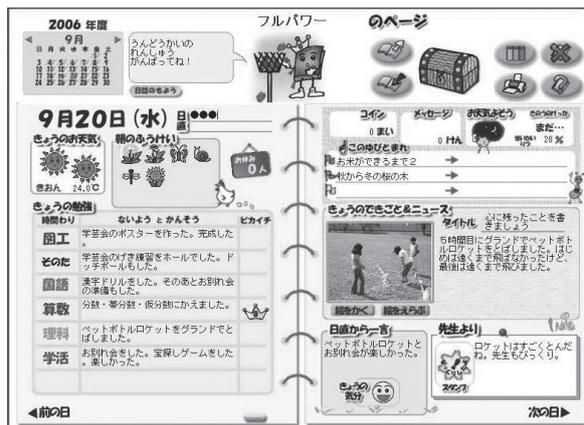
更に日本語の力を学校外の場で活かすために、日本の小学校とのメッセージ交流を行った。パソコンで記録する学級日誌には、その日誌を通してメッセージのやりとりができる機能がついており、同じソフトを使っている日本の小学校とメッセージの交換ができた。日本で流行していることなど生活一般の話題から、社会科や総合に発展した交流を行うなど日本の小学校の友達と交流することができた。児童同士でメッセージのやりとりができるため、日本からのメッセージを楽しみにする姿が見られた。特に鳥取の小学校とは「ニュース番組を実際に作り、DVDにして送り、感想メッセージのやりとりを行った。日本の学校と交流することで日本語力のアップや相手を意識する力を高めた。

(5) 交流学习で言葉を考える

更に日本の学校との交流学习に取り組んだ。日本人学校では各学級の人数が少ないために友達同士で日本語をあまり使わなくても意思疎通が容易にでき、それがメリットでもありデメリットでもあった。課題として「自分の意見が学級全体に通しやすい。」「人間関係が固定化され、考えの幅が狭くなる。」などの課題があった。そのため、日本の小学校と交流することで日本語の活用機会を多く設定した。私は交流学习を通して3つの力を育てたいと考えた。「日本語を活用する力」「友達の思いや考えを受けて、自分の思いを表す力」「伝えたいことを考える力」の3つである。交流の中でメッセージのやりとりを通して、「相手がどのような思いなのか。」「どのように表現したらいいか。」自分や相手に対する思いを考えさせたかった。相手校の先生とメールで連絡を取りながら交流を行った。交流のツールとして、電子模造紙を活用した。これは写真の添付や文章の書き込み、データの添付などが自由に行え、児童でも容易に操作が可能であったためである。また画面のレイアウトも自由なため、授業の中で見やすくレイアウトを変更することもできた。更に時差に関係なくそのサイトにアクセスするだけで書き込みや資料の提示などの交流が可能であり、学級の活動進度に余裕をもたせながら、相手校と共同で1枚の電子模造紙を作り上げていくという点で交流が行いやすかった。

活動では、まずは自己紹介から始めた。相手校の児童は5・6年生だったので、先に打ち込んでもらい、そこから文章や写真の様子を考えて自分の自己紹介文を作成した。「自己紹介の文章にはどんなことが書かれているのか。」「写真を撮るときの顔の大きさはどのくらいが適当か？」などを考えて自己紹介のページを作成した。

次に歴史交流と言うことで歴史的な建造物の交流を行った。相手の学級に歴史的な建物を先に入力してもらい、その後、ウィーンの歴史的な建物の紹介文や写真などを作成した。相手校の歴史紹介の文章や写真を参考にして、どのようなことが書かれているかを考えさせ、歴史的建造物を選んだ。特にウィーンは街全体が世界遺産に登録さ



web型の学級日誌で毎日の生活を記録

れており、歴史的建造物がたくさんあったため、「なぜその建造物にしたのか。」理由を考えさせて選ばせた。特に参考にしたことが、ウィーンに来る日本人観光客が多く行く歴史的建造物である。ガイドブックなどで調べさせ、その中からシェーンブルン宮殿やグロリエッテなど選び紹介した。このような活動を通して交流相手校の友達の文章に触れ、内容を分析し、相手のことを考えた返信をすることができるようになった。また、相手の内容に関心を持ち、返信の内容を考えるとという交流の方法を身につけることができた。更には自分たちが住んでいるウィーンという町の良さを知ることができた。



交流の中で完成した電子模造紙

3. 3年間を通して

日本人学校では学級担任以外にも教科担任としての他の学年や中学部の教科を指導しなければならない。私自身も中学3年社会や小学6年社会、中学美術など教科担任としての授業を受け持った。その中でも児童・生徒が日本語を駆使して話す場面を多く設定した。中学3年生の社会科では、日本で住んでいた町の特徴を調べ、実際に役所に電話をして疑問を解決させた。電話では疑問を解決するというねらいもあったが、相手に対する礼儀や電話での話し方など、コミュニケーションについても学ばせることができた。

更に美術では、鑑賞の授業では俵屋宗達の風神雷神図(屏風)を使い、生徒に雷神・風神の配置を考えさせた。その際に、「なぜそのような配置にしたのか。」という理由を考えさせ発表させた。このような活動を続けていくことで、場面に応じた話し方や聞き方を身につけることができ日本語についての意識が高まってきたように思う。

4. 終わりに

ウィーン日本人学校に赴任した直後は、ウィーンの地の利を活かした現地理解教育にばかり目が向いていた。しかし、落ち着いて教育活動に取り組むことができるようになると日本語環境が乏しい現実を痛感した。日本語の書籍やテレビ・ラジオもほとんど無く、耳に入ってくる日本語は明らかに日本よりも少ない。そのような中で育っていく児童・生徒の日本語の力をどのように育てていくか。これが赴任中の私のテーマとなった。日本人学校をから一歩出ると周りはドイツ語。そのため学校の中で日本語を意識させることが非常に重要であると思った。異国での教育活動はいろいろな面で制約される。しかし、そのような状況の中で自分には何ができるかを問い、日本で行ってきた教育実践をアレンジしてその国の日本人学校に合わせた教育活動を行わなければならないことを改めて実感した。赴任している間、私にとっても日本語について考える貴重な機会となった。